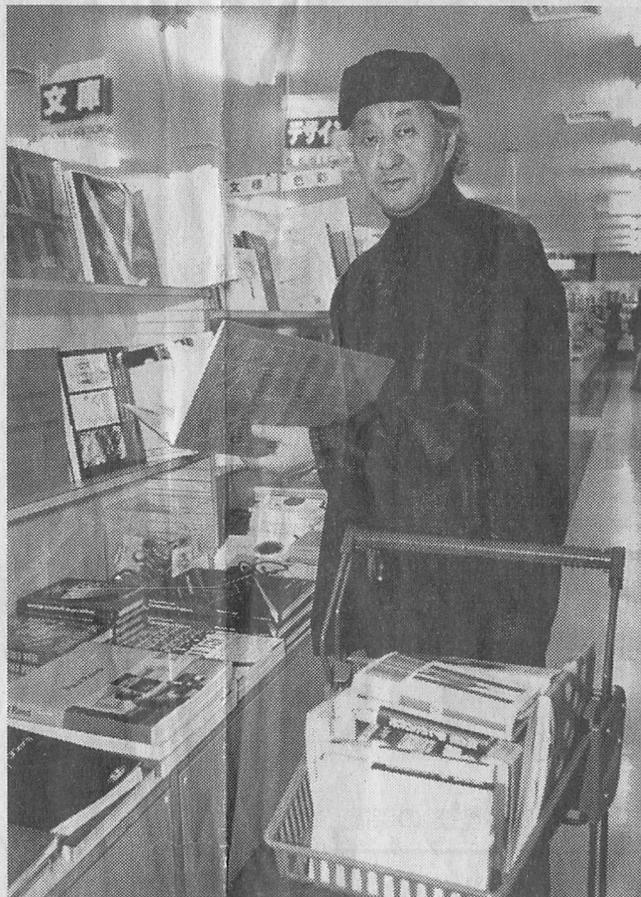


本屋さんに行こう

建築家 磯崎新さん



このようにしてカートに本が山積みになっていったのだ
 東京・表参道の青山ブックセンター本店で、西山麗氏撮影

世界的建築家の世界的読書

磯崎新さんの活動は近年、ますますグローバルになっている。舞台はイタリア、スペイン、アメリカ、中国から、ロシア、イスラエル、カタル、イランにまで及ぶ。日本を離れ、世界を飛び回る日々だ。

雨が降って肌寒い土曜日の午後。テハランから帰国して間もないのに日程をやりくりしてもらい、東京・表参道の青山ブックセンター本店へ。「仕事している国を理解する手がかりになる本を選びましょう」

テハランではイラン石油省本部ビルの国際コンペで審査委員長を務めた。そこでまず『イスラームとモダニティ』を。ハタミ政権下で、西欧的価値と葛藤するイランを論じている。「ハタミ師の演説は、ハイデガーやヴァイトゲンシュタインを引用した

りして面白い。イランはいま変わろうとしていて、前衛的な芸術も展覧会の中でなら出せるようになったとか。少し前の中国のようだね」

その中国。近く現代美術展「上海ビエンナーレ」で、2日間にわたるシンポジウムの共同議長を務める。手に取ったのは『江南』。朱子学など中国の知を生んだ長江下流域の文化を、歴史的に検討した本だ。

そばの平台に、『百年の愚行』が置いてあった。20世紀に人類が犯した過ちをおさめた写真集で、新聞紙大のオリジナル版と、縮小した普及版の2種類。大きいのは飛行機の中に持ちこめないけど、小さいほうならそれをめくりながら、世界貿易センタービルの跡地計画の話になる。「僕は瓦礫のままがいいと発言した

けど、知り合いのアメリカ人建築家たちももっと高く、大きくしろ、という意見ばかり。このままでは建築家の信用は失われるでしょう」

ニューヨークでは、再開発されるリンカーンセンターのエイブリー・フィッシャー・ホールコンペで、最終の3組に残っている。「将来の音楽ホールはこういうもの、という考えが僕にはあるんです。それを向こうが受け取るかどうか、ですね」

建築のコーナーに回り、『コンスタンティン・メリニコフの建築』を選ぶ。1920〜30年代のロシア人建築家の図録。ロシアでも近く、サンクトペテルブルクにあるマリインスキー劇場のコンペに参加する。最後は、日本人とは何かを歴史的に考察した『日本人の境界』。日本の歴史的建築と文芸を評論家の福田和也氏と論じた対談「空間の行間」(「論座」連載)を、単行本にする作業の資料だ。「この著者の前著『単一民族神話の起源』は面白かった。今度も期待できるかな」

磯崎さんはこの後も店内を周遊し続けて、20冊以上カートに入れた。「いつもこれぐらいは買います」。この好奇心こそが、世界が求める創造力の源に違いない。(村山正司)

【今日のお買い上げ】

- ①『イスラームとモダニティ』(中西久枝著、風媒社・2500円)
- ②『江南』(中砂明德著、講談社選書メチエ・1500円)
- ③『百年の愚行』(Think the Earthプロジェクト発行、紀伊国屋書店発売・2400円)
- ④『コンスタンティン・メリニコフの建築 1920s-1930s』(リシャット・ムラギルディン監修、「ギャララー・間」企画・編集、TOTO出版・1905円)
- ⑤『<日本人>の境界』(小熊英二著、新曜社・5800円)

合計 14,105 円